WASON
HQ
1104
J741

Nov. 1893
No. 358

明治廿六年十一月廿五日發兌

女學雜誌

第三百五十八號

女學雜誌社

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.
(JOGAKU ZASSHI.)

第三百五十八號目録

社説
經濟の道(下)
克己の精
常識
經濟上不便の便利
盗む莫れ

隨感
大丈夫の秋の暮
痛苦に會ふの聖樂
良心よ、吾等に語ると莫れ

女學
何をか女子教育の衰運と云ふ
躰操敎授上の一要點
女學校の校舎(廣島英和女學校、粟屋七郎)

兒籃
いはひ歌
第五回(若松しづ子)

家政
小兒の言葉(けい子)
父母○守兒○朋友○學校○結論

徒然草
獨居記(某女史への消息)
三章(小日向生)
十二月をよめる今樣(採月女史)

雜録
日本女醫の由來及前途(荻野吟子)
おつかさんは只おつかさん

書架
日本地名全書○古今史譚○婦人矯風雜誌○產婆

逸事
山本覺馬、ゼンスに一生の覺悟を問ふ、
新島襄、同志社の礎に三言を遺す
氷川老伯、大に畏愛す

時報
伊豫今治に於ける女子教育○上毛の排存娼○秋田市會の意見○大日本婦人敎育會○大坂婦人慈善會○一滴同情の淚○美人でなければならぬ○安生堂產院○西京通信

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

賣捌所　東京市神田區表神保町六番地　女學雜誌社書店

三條實美公　芳川顯正君　渡邊洪基君　清浦奎吾君題序
文學士瀧田健次郎君校閲　中洲濱本義顯君著
●婦女教育明治姫鏡　全一册　正價五拾錢　郵稅八錢

坪谷善四郎君著、(楓湖、永湖、月耕密畫)
●閨秀錦嚢日本女禮式　鉄入美本全一册　正價五拾錢　郵稅拾貳錢

文部省衛生事項取調囑託小兒科醫學士三島通良先生著
●はゝのつとめ　全一册　正價五拾錢　郵稅六錢

華族女學校監從五位下田歌子君述
●家政學　全二册　正價六拾錢　郵稅拾貳錢

坪谷善四郎君著
●家政整理法　全一册　正價拾五錢　郵稅六錢

飯島半十郎君著(密圖挿入)
●家事經濟書　全一册　正價拾貳錢　郵稅四錢

山田美妙齋君著(密圖挿入)
●日本室内粧飾法　全一册　正價拾五錢　郵稅六錢

醫學士中村正道君著
●小兒養育法　全一册　正價拾錢　郵稅四錢

子爵福羽美靜先生校閲、西田敬止君著(文部省撿定濟)
●帝國女子修身鑑　全四册　正價六拾錢　郵稅拾錢

下田歌子女史題辭、西田敬止君序文、岸上操君撰
●和漢婦女龜鑑　全一册　正價拾五錢　郵稅六錢

幸福散史濫江保君著
●泰西婦女龜鑑　全一册　正價拾五錢　郵稅六錢

子爵森有禮君序文、戶塚文海君序文
陸軍々醫總監松本順君題辭、堀誠太郎君譯
●婦女性理一代鑑　全一册　正價三拾錢　郵稅拾錢

第三高等中學校教授高橋金一郎君著
●通俗看病法　全一册　正價拾五錢　郵稅六錢

須永金三郎君著(密圖入)
●婦女手藝法　全一册　正價拾五錢　郵稅六錢

東京府高等女學校教頭永江正直君著
●女子教育論　全一册　正價拾五錢　郵稅六錢

矢島錦藏君序文、伊東琴次郎君著
●胎内教育　全一册　正價拾二錢　郵稅四錢

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

賣捌所　東京市神田區表神保町六番地　女學雜誌社書店

● **日本婦女用文**　税所敦子君序文、佐々木信綱君著　全一册　正價廿五錢　郵税三錢

● **日本女子用文章**　閑院宮妃殿下題字、東久世伯序文、佐々木信綱君著　全一册　正價拾五錢　郵税六錢

● **應用和文學**　大和田建樹君著　全一册　正價拾五錢　郵税六錢

● **婦女詞藻**　税所敦子君題歌、佐々木信綱君撰　全一册　正價拾二錢　郵税四錢

● **歌の栞**　東久世伯題字、高崎正風君題字　福羽美靜子序　佐々木信綱君編　全一册　正價一圓　通運拾五錢

● **新撰歌典**　第一高等中學校教授落合直文君著　全一册　正價六拾錢　郵税拾二錢

● **歌學捷徑**　東久世伯題字、井口鑒太郎君著　全一册　正價拾五錢　郵税六錢

● **應用歌學**　大和田建樹君著　全一册　正價拾五錢　郵税六錢

● **千代田歌集**（弘訓翁石版肖像入）　東久世伯題字、近衛公爵題詞　高崎御歌所長題詠　佐々木弘綱大人撰　全三册　一册六拾錢　郵税拾壹錢

● **畫法大意**　久保田米僊先生著　全一册　正價拾五錢　郵税六錢

● **書法大意**　小野鵞堂先生著　全一册　正價拾五錢　郵税六錢

● 高等女子習字帖 **烏丸帖**　橘千蔭先生著　全一册　正價三拾錢　郵税四錢

● 長歌今樣琴歌 **日本雅曲集**　大宮宗司君編　全一册　正價二拾錢　郵税六錢

● 家庭教育 **女學校**　谷口政德君著　全一册　正價拾二錢　郵税二錢

● 家庭教育 **幼稚園**　谷口政德君著　全一册　正價拾二錢　郵税二錢

● **日本女禮式**　尾形月耕君筆　全一帙　正價三拾錢　郵税二錢

● **日本文學全書**　第一高等中學校教授落合直文先生　第一高等中學校教授小中村義象先生　校訂　學習院教授萩野由之先生　標註　全廿四册　每編讀切　洋裝美本
正價一册(四百廿頁以上)廿五錢◎十二册金二圓五拾錢
全部二十四册金四圓七拾五錢◎郵税一册三錢ヅヽ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

明治二十六年十一月廿五日發兌
第三百五十八號

社説

經濟の道（下）

（十）克己の精

「克己」の覺悟は、經濟の生命なり。情を制し、慾を抑へ、不自由を忍ぶの氣力なければ、到底勤儉の事行はるべからず、勤儉の事行はれずして能く經濟の道立んとは未だ曾て有らざるなり

而して、經濟上に於ける此の克己と忍耐とを生起せしむるの本源こそ、極めてこゝろすべき所にてあるなれ。克己、忍耐は氣力によりて、刺激せられ、「望」によりて維持せらるゝものなれど、此氣力の產出する所、此の「望」のかゝる所に愼慮せずんばある可らず。

單に、己が財產を積み、ゆく／＼の平穩をはかり、以て世の榮華安樂を得るとをのみ望みとし、この望によりて、目前の我慾を制し、暫らくの難儀を耐ゆるとせば、これ利己なり。如此き克己忍耐は、吾黨の不可とする所なり。

所云る積善の爲に富を積み、不幸者を憫れむによりて躬から節儉し、天職を重んずるによりて勤勉力行し、以て財を擧げ產を殖やし、之を公益利他の爲めに謹んで所有し管理するの精神を可とす、此精神によりて、希望生じ、忍耐續き、克己成るにあらずんば、不可なり

（十一）常識

經濟に、忍耐、克己を要すると斯の如し。左れど、之と同時に、餘りに、飛超たる、餘りに世の常ならぬ仕方を案じ、無理に之を强行せんとするとなかれ。一氣呵し熱情迸ばしるの時に於ては、何如なる辛棒も出來べくと思はれ、非常法外なる豫算を立てゝ、必らず其規律に從はんと覺悟するともある

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

（二）

ものなり。左れど、經濟の案は十年、二十年に渉り、久しふして後ち其結果を收むべきの道なれば、如此き法外非常の强行は、永くつゞく可きにあらず。何の日か一と度び負けて一度び其規律に背けば、情慾の水、洪々として此堤の破れより逸出し、再たび復た治む可らざるに至らん。此に於てか、ヤケとなり、亂暴となり、放漫となる。自己一身すら既に斯の如し、況んや、他の人に待つ所ろのものに於てをや、更に一層寛容して、隨分に餘裕ある仕方を定め置かずんばある可らず。ことに、下女下男の如き、覺悟少なき輩に關して、立つる所ろの定めは、初めより寛大ならざる可らず。余りに究竟なる規律を置き、强ひて之に從はしめんとするの餘弊として、意外の逃穴を明けられ、此方に制したる情慾が一層强大の勢力をもて彼方に逸出するは屢々之れあるもの也。

故に、經濟には、「常識」を要す。なみ〳〵の人が、なみ〳〵の覺悟を以て實行し得べき格を標準とし、之に從がつて豫算を定めずんば、其豫算は決して久しきに行はれず、規律はこなたより自づからにして破れんとす。

（十二）　經濟上不便の便利

「常識」を重んじ、簡易を旨とし、究竟不便を去り、專ばら普通の人情に鑒んがみずんば、經濟の法實地に行はる可らず。然りと雖ども、之が爲めに、只管ら便利好きとのみを希望し、兎角に好都合の仕方に着目して其新らしきに就くことを樂しみとするときは、習慣暴りに崩れ、紀律やうやく破れ、惰氣之より兆さんとす。故に「便利」の二字は、時として、經濟の敵となることあり。就中、「新しき便利」は、舊き結構を輕々しく打破し、折角に固結せる治安をさん〴〵に打くづすことあるものなり。深く戒心すべき用意此の上に存す。

左れば、通常、人の見て便利とする所を、經濟に於ては、不便となすことあり。小徑を走り、滊車に乘るなど必ずらしも迅速と云ふ可らず。遲々として牛の如くなる歩みを以て經濟上急行の進みとなすことあり。目前の不便を便利として、敢て之に忍び安んずる所ろ、則はち千万無量の味はひありと云ふべきなり。前年、佐田介石師、此の秘訣を巧妙に說法し、其の栽培經濟問答に一例を擧げて曰く、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

昔し、河の邊りに一つの村あり、舟や筏にて荷を積み下し荷を積上するを以て活計を立てたり。然るところ、其の村中に一の婦人あり、河まで足を運び洗ひ洒ぎいたし或ひは水を汲むを不便利とし、それより日夜に考へて、筧にて水を取るとを工夫致せば、向ふ三軒兩鄰のもの、それを見て大ひに便利と喜こび、相爭ふて筧にて水を取るとになつた。それより、その一ヶ村殘りなく皆その見眞似をいたし、河上より我家々々に筧にて水を取つたゆへ、其筧の爲に河の水が減つて舟も筏も通はぬようになり、一ヶ村みな活計を失なつたは、筧にて水を取る所の便利の道を考がへ出したゆへなり。

右、一村の事、以て一家の小にたとふべし。番頭丁稚の名を改稱して、受附、掛長とし、行燈にかえて電燈を點じ、子僧や―と呼ぶ代りに召び鈴を用ひ、使の代りに電話を用ゆ。皆眞とに文明の器具にして、一朝忽ち開化せるが如き觀ありとも、之が爲めに富の增さゞるを如何んせん。新商人の末路大抵分産に了るものは、之が爲め也。佐田介石師、ランプ亡國論を唱ふ、其言もとより矯激なりしとは云へ、中に熱涙をこめ、赤誠を含む、豈に多くの眞理を存せずと言はんや。

(十三) 盜む莫れ

吾が産を殖やすの主旨は、他を益するの主旨たるべし。故に他を損して、吾が産を殖やすと云ふは、啻に不正の事なる耳か、更に不道理の事なり。

勞らくものは、其糧を得、額に汗するものは、其食を得、營々業に勤むるものは、其利益を得、正當の益を收むるは、義しき權理なり。然れども、其以上に過越して、不當格外の利を貪ぼるは、盜むにひとし。

誡に云く「盜む勿れ」と。世人大概ね曰く、吾あに盜みせんやと。然れども、滔々たる俗商、眞に、盜罪の跡なきものは極めて少し。

盜むとは、人の財産を奪ふの義なり。奪ふとは、受く可きの分量に越えて詐りて受くるの義なり。左れば、彼の欺むきて不當の利を取り、僞りて餘計の口錢を取り、方便と云へる都合よき名の下に、種々の詐僞を行ひ、買客を眩惑せしめて、以て過分の利益を貪ぼるは、豈に盜の一種にあらずや。人を

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

殺すに、杖を以てすると、刄を以てすると異なるとなくんば、盗むに強ひて取ると、竊かに取ると、詐わりて取ると、何んぞ亦相ひ異なるとあらん。ひとしく皆ともに盗みの罪の中に算入すべき也。

違約の爲めに、人の財産を害し、借用して返辨せざるの類、皆また之に隣するもの歟。

隨感

○大丈夫の秋の暮

咲き殘る秋の菊の花一つ、机の上の小き瓶に首うなだれて倚りぬ。机に對ひ默然として思ひに沈む男子ありけり。やうやくに、首べを擧げてヂット花を見つめしが、ハラ〱と涙を落し、唇をかみて聲を飲みぬ。俄かに氣を鼓して、昂然、胸を立て、口のほとりに微笑の影見ゆ。雨後、山の背ろより、日光の一あたり照りたらんが如し。左れど、何事ぞ、乍まち復た、首べを垂れて、さめ〲と泣く。

あゝ、花よ、御身が古郷は、彼の土塊なりや、御身が養なひは、彼の塵芥なりや。然るに御身、何如にして其美を呈し、其姿を得玉ひしや。御身を賞し、御身を愛せしもの、古來幾人ぞや、われも亦た其後へに屬すといへども、己が御身を思ふの情は、蓋し古人と異なるものあらん歟。あゝ、花よ、吾は御身の節を汚さじ、御身の裝ほひに手を觸れじ。遙かに御身の美を賞し、心にとめて其色を慕ふとも、みだりに言に出して御身に語らじ。御身言語を發せず答へ玉ふとのかたきに同情を表すればなり。御身時として心に己が誠を察知し玉ふか。御身無言にして吾を眺め玉へば、われも亦無言にして御身に對せん。あゝ、花よ、御身、暫らくして何處に其形體を寄せ玉はんとす。無情の人は、數日御身を弄そびて而して直ちに御身を泥土の上に棄てんとす。御身の形骸は、其古郷に歸り玉はんか、左れど、御身が靈は、何處に安んじ玉わんとす。あゝ、花よ、わが限りなき切なる心を納れよ。吾は、御身の形骸に手を觸れじ、其色に指を染めじ、無情男子暫らく之にあづかりて可なり、吾は瞑目切齒、少間之に忍ばん。請

ふらくは、花よ、其靈を吾に托せ、吾が温たかき赤き誠心の内に托せ。

聲を飮みて、聲を沒すれども、涙、眼より禁めあへず、限りなき吾が思ひ、何處に寄せんや。さめ〴〵と泣きて、泣くに滿ちず。苦悶、訴ふるに由なし。戸を開きて、天を望めば、雲漠々、一鳥さびしげに飛ぶ。田野、稻すでに苅られて、孤木、風に聲あり。

物の哀れを知りそめてより、秋は一しほ哀れなり。無情の人の冷やかなるは、必らずしも勇とせず、吾は如此き勇を高しとせざる也。勇士よ、勇士よ、木石情なくして哀別に感ぜざるは、其勇なる乎。つれなくして勇ましきは易し。哀れを知りて、一氣制する所あらん人をこそ、大ひなる膽力ありと云ふべけれ。

○痛苦に會ふの聖樂

ある日、道のほとりに、外國人が子十二三歳斗りなるが、杖にたより、跛ひきて、歩むを見たり。車にや轢れたる。木よりや、落ちたる。もしくは、生來の不具なりや、はた重病の餘毒なるか。道ゆく人、ふり反りて注目すれど、其兒無邪氣に跛行して、毫も掛念せず、年ひさしき前よりの事と思はるゝにつけて、心、千々に察せられ、親なる人の歎きに同情を寄せて、暗涙、胸の底に湧きぬ。

其後、わが家の兒、突然、一足を痛め、絶叫して苦に喚ぶとあり。一足を悉とく撿するに、何等の異事なし。然るに泣くと、いよ〳〵烈し。醫を招きて、診察を請ふに、醫不審して、病證不明と云ふ。但だ尋常の治方を施こしたる耳。愛兒、益々泣き、而して少間、苦を忘るれば、匍匐膝行して遊戯す。なさけなき哉、頑是なき愛兒よ。何如にして吾れ其苦を去らしめん乎と。つら〳〵其狀を見て、昔時路傍に目撃せし跛行の一兒を連感し、今昔の念ひを比較すれは、今日は火の如く、昔日は氷の如かりき。あゝ同情は、自己もしくは尤とも接近せる人に於て經驗せし事にあらねば、熱なると能はず、と覺り、世に於て人の遭遇する苦痛の秘義を感じぬ。苦痛なくんば、同情あらず。同情なき冷寒々の人として生きんとは、死せるにひとし。われは木石と伍して長壽するとを欲せざる也。左れば、吾は、苦痛を感謝してうけん、其の教授する聖なる

秘義を味はんと言ひぬ。

○良心よ、吾等と語ると莫れ

モーセが、シナイ山上に神の御言葉を承はる比ろ、イスラエルの民は、雷と電と喇叭の音と山の烟れるとを見、懼れをのゝきて遠く立ち、モーセに言ひけるは、汝われらに語れ、我等聴ん、唯だ神の我等に語り玉ふとあらしめよ、恐らくは、我等死なんと、(出埃及記、二十)。

人の嚴粛、眞面目を懼るゝや久し。光明の燦たるを避けて、わざと、暗きに就かんとす。良心、しば〱直接に吾等と語らんとすれば、吾等之より遠ざかり、「良心よ、我等に語るべからず、恐らくは我等死せん」と言ふ。而して、世俗の聲に聞き、同味の音に聞き、算盤の響に聞き、「嗚呼、世俗の音よ、汝、われらに語れ、良心をして直接に吾等に語るとなからしめよ」と言ふ。夫れ人の嚴粛眞面目を恐るゝや斯の如し。

女學

○何をか女子教育の衰運と謂ふ

女學の盛衰とて、世上の評判の昂りまた下るは、必らずしも掛念すべきにあらねど、女學生たるもの自身が、勉學の氣力の衰ふるとこそ、尤とも憂ふべきなれ。一時は、天にまで上られし精神希望も、世運のつれなきによりて、下つて陰府の暗きにさがり、何となく勉學の氣力衰ろへ果てんとするこそ、油々しき事件なれ。敎師は、此一點に着目し、女學生が精神を皷舞し、其氣力を引立て、元氣を之に吹込むべし。而して、敎師が斯く爲さんには、敎師たるもの自身に、十分の精神、十分の氣力なかる可らず。敎師にして女學衰ろへたりなど廣告し、閉口して世の素人が氣運に制せらるゝに於ては、女學生が元氣を損すると勿論なり。女學の衰ふるとは、世の評判の衰ろふるとにあらず。俗人の氣受けの減ずるとにあらず。英學の廢れたるとにあらず。眞實なる女學の衰微とは、即は

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ち、女子教育者と、女學生とが、精神及希望の衰ろへたるとをば申す也。

○躰操教授上の一要點

我國學問の風たる、心を練り道を修むるとを理想とし、單に器械的の事と見ゆる技藝に至るまで、親切に此心掛を含ませたれば、學生も亦自づと此風を理想とし、道味なき事は、卑下の事なる如く感ずるの僻あり。

左れば、學校にて躰操を教ゆるには、單に之を器械的の事とせず、之を心術の鍛練に調和し、之に道味を加へて精神的修養の一助となす工夫をとるべし。即はち、紀律、沈着、優美等の氣象を養ふとを説き、一の躰操道なるものを教示すべし。恰かもこれ、武藝に武道あるが如き也。かくすれば、躰操の卑しまれ又嫌はるゝと、今日の如くならじ。今日、躰操を教ゆるものは、たゞ之を器械的の事とし、單に運動の一科となすが故に、中學以上の學生に於ては、之を重んずるとなし。女生に於ては、ことに然りとす。

○女學校の校舎　廣島英和女學校　栗屋七郎

校舎は生徒養成に尤とも必要なる器械なり、其構造、位置、方向など、こと〳〵く其校の主義目的に適わざる可らず。然るに、普通の構造法、普通の道理は、世すでに定論あれば、こゝに吾人をして一言補なふ所あらしめんとせば、曰く、其構造宜しく女性の特質に應すべし、宜しく優美なるべし、宜しく清潔なるべし、宜しく質素なるべし、宜しく用意周到なるべし。講堂は、元より謹嚴神聖の靈場にして、兼ねて校舎の中心たるべし。女禮室は、特に其道の人に托して諸式諸法を實習執行するに便利なるやう建築すべし。

器具　女性は其身躰の營養上必らずしも男子と同一なるものにあらず、從がつて机、腰掛なども亦た特に女性に適應せざる可らず。

寄宿者　は家族組織を最良とす。所謂る別舍主義これ也。左に吾人が理想とする所を陳べんに、

組織　五人乃至十人づゝ住ひ得る寮數戸を建て、各寮皆な一家族の制を爲し、一家の主婦、一家の女妹が實習すべき洒

掃、應對(元より妄りに何人にも應接せしむべきにあらず)。各室の粧飾より料理万端及び家計經濟などを實習實行するを得せしむべし。

一寮毎に寮長あり、彼は年齢長じたる上級生にしし一寮中の若き女生が姉たり母たる責任あるもの也。舍監は。寮長の上にありて、全寄宿舍を管理すべし。

構造　純然たる日本風にして中等社會の通常の住家を摸範として建設し、勉强室、應接室、玄關、並に入口、寢室、化粧室、物置、及食室あり、各室に備ふべき必要なる器具も亦盡とく整頓するを要す。但だ、庖厨は、便利と安全との爲に之を別棟とし全校に一ヶ所あらしむべし。

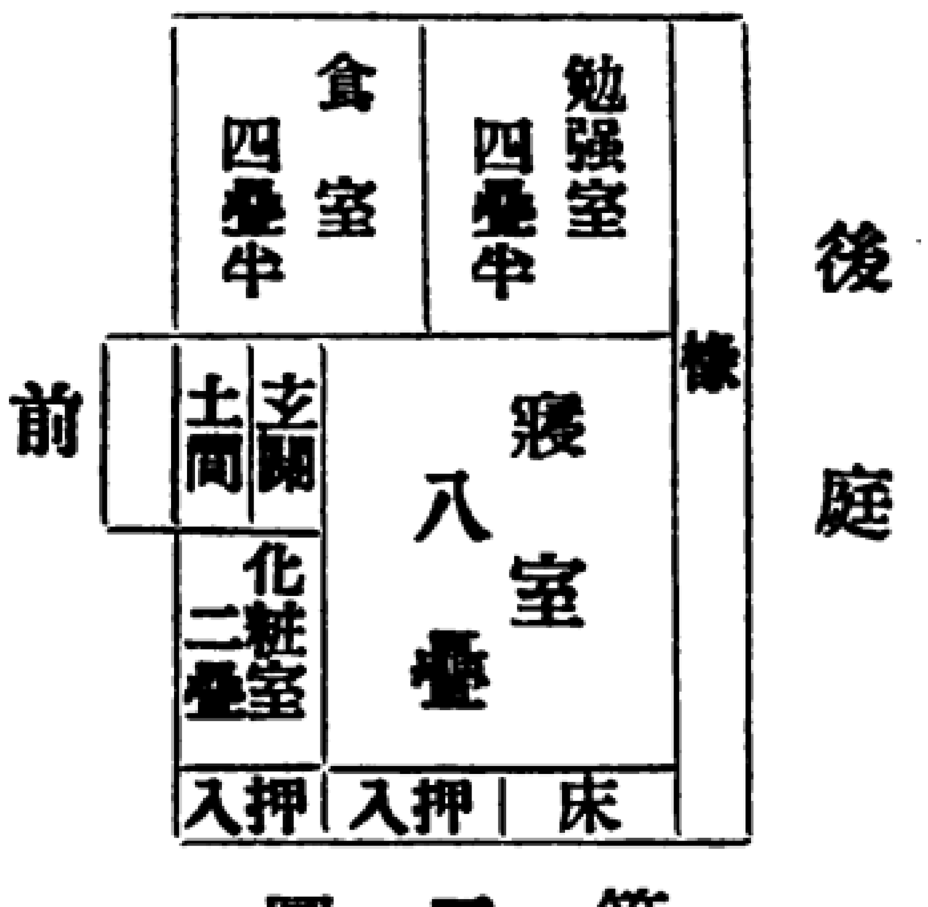
之れ其大要なり。要は、生徒をして校に在る日よりして齊家の實務を經驗實習せしめんとするにある也。

今ま左に圖案一二を附す、

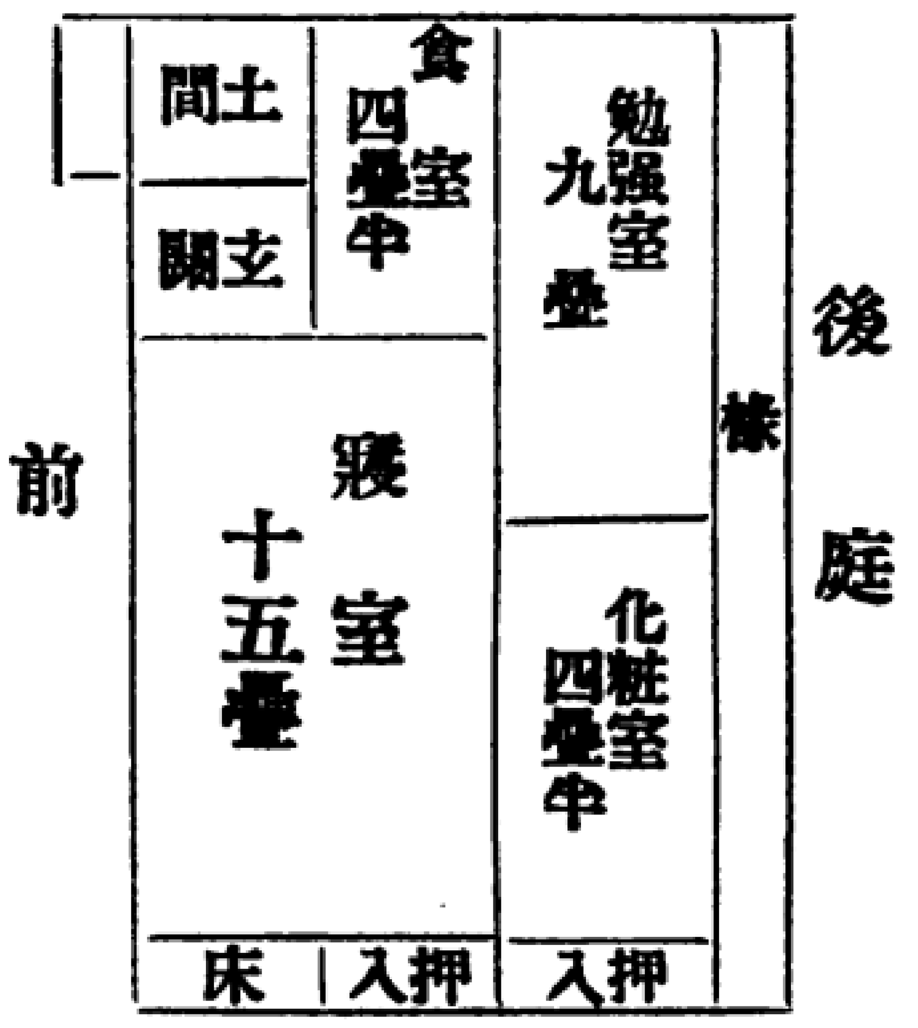
第一圖、一家寮長ともに五人ほどの積りにて平屋造りとす。應接室を別に設うるとは、學校に於ては大抵不用ならん。故に、此には、寢室と兼用せしむ。

第二圖、一家寮長ともに十人の積りにして、亦、平屋づくり。應接室と寢室とは等しく兼用するものとす。

第一圖



第二圖



此の組織と構造とによる時は、寮長たる長年の女生は、一家の妻母の責任たる經濟、年少者の監督、室内の取締方などを實習し得べく、年少者は、一家の年少女子が責たる家事の雜務を分掌し、或は洒掃を司さどり、或は食事を擔當し、或は寢室便所の世話を引受くるなどとし、然して之を巡廻しにする時は、家庭に在ると等しく家事を實習し得べしと信ず。斯の如くして家事に關する諸務を實習する時は、女學生の今日の最大批難の點を矯正するとを得べし。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

兒籃

いわひ歌

第五曲（下半）

しづ子

それから勝手の眞中へヅウト椅子を併らべ升たが、十人前丈椅子の揃はぬのも尤のとでした、なぜかなれば、家内中一度に腰かけ度と思つたとは極尠いとで、誰かしら他出して居るとか、床にはいつて居るとかで、其間甘く融通がついて居つた譯でした。併し薪箱と炭取りが出て、漸く數が揃ろひ升た。子供等は齢嵩を始めとして、順序よく列らび升た。即ちセイラを頭に、炭取りの上に坐つたのは、ランでした。さうして、ラグルス夫人は律義な骨折に流した汗を拭ひも合へず、相對して向ふへ腰をかけ滿足さうに、子供等を眺めて居り升た。

サア、これで、わしがいつちやア可笑しい樣だけど、こんなに、揃ろひも揃ろつて、奇麗で、氣の利いた子供らア見たとがねへよ！。とつさんに一目見せて遣ていい樣だ！——ランや、幾度いふンだナア、帶ィ捨くつちやいけねへつて、さういつて聞したらう、其帶が解ると、其着物が、上下くつゝいちや居ねへていとチ、ヤア、さうしたら、おめへ、どうするだ？——サア、みんなが、よしか、かあやの顏を、みんな見て居な。かあやの里のムックドリルスといふのがどんな家柄だといふことは、よふく、おめへらに、話して置いたらう。わしらア、大威張りなんだ。おめへらア叔父さんていのは、紐育の警察へ出ていて、新聞見りや、毎日の樣に、立派に名めへが出て居よふが——だから、迚も、他人みた樣に、ぞんぜいものに子供を育つちや、濟まねへンだ。他處へでも行く時にア、見つともなくねへ樣な着物も着、行儀も氣ィつけなくちやならねへだ。おめへらア、今夜、あすけへ行つて、どんなことをオするか、見ていもんだナ。始めつから、すつかり、やつて見よふ。そんだから、サアみんな、一旦戶の向ふへ出て見ナ。それから、あすこん家の坐敷へいる時、どんな眞似するか、見てやるから。こつちが坐敷の積りで、かあやが、ベードの奥さんにならア、子供等は擦れつ、もつれつ、大騷して、次の小間へ退ち升た。

さうして、ラグルス夫人のツント濟まして、反身になつた處の高慢に、さも身上が自慢だといひさうな樣子は扣へ目でしとやかなベイド夫人には似もやらず、矢ッ張り、ムックグリルス一族の人とよりは思はれませんかつた。

後ろの部屋は小さいのに、子供が大勢なので、中の騷ぎは、牧場の獸が一時に、逃げ出したかの樣でしたが、さて母親が「サア、は入れ」といつて、戶を開け升た時、竊盜犯の罪人でもある樣な步き振りのセイラを先にたてゝ、子供たちは、クツ〳〵笑らひながら、ゾロ〳〵とはいつて參り升た、ラレは一列の最末に居て、其戶が天國の門でも有つて、時に間に合はねば、〆切られるとでも思つたか、兄や姉たちを突き扱いて、もぐり込み升た處が、揉まれる拍子に轉ろんで、これは大失敗でした。

ラグルス夫人は恐ろ敷顏して睨まへ升た。

ソラ、キット、そんなこつたらうと思つた、其ざまア！サア、またあすこへは入つたり、一人殘らず、さうして、モウ一度、遣つて見ろ、ラレは四ツン這ひにならずには入れねへッていふッなら、家にお留守居だよ、分つたか？、

いよ〳〵眞面目の掛引になつて來升た。ラグルスの面々は、クッ〳〵笑つて居た聲を止め、後ろの部屋へは入つて、暫らくして出て來た處を見ると、一同お袋の權幕に恐ぢて、居處の羊然と、投頭したはまだしも、一列に足拍子を揃へて繰り込み升た。ラグルス夫人は、遣る瀨なく、

いけねへナア、矢ッ張り、先よりまだ、見つともねへ。丸で珠數繫ぎの懲役人見た樣だ。そんな行儀ていは有りァしねへ。モウちつと、離れ〳〵になつて、さうおつう、評まらずには入られさうなもんだナ、誰れも、おめへらァ捕つて食ふッていやしねへよ。

三度目は漸く思ひ通り、成効して、子供等は前の如く、弁らんで席に着き升た。さて、ラグルス夫人は一際、仔細らしく、

おめへらあ、知つてるだらうか、見ばの好い帽子が、皆んなにャ、行渡らねへ、有つた處で、おめへらあ、家へへ入ッてから脫のチキット忘れる方だから、被せられねへかも知ねへが……なんにしろ、好のが引はり足ねへんだ。サア、それだから(みんなが、かあやの顏を見て居ろ)おめへらア丸で、被りッこなしで行な、一人も。それで、坐敷へ出て

帽子ィこちらへ、お置なせいッていはれたら、セイラ、おめへ、みんなの代りに、口ィきいて「今晩は暖つたかなとも、暖かし、あんまり、近い處だから、邪魔でねへ樣に、うちへ置て來升たッて、さういひナ。よしか、おべいて居られるか？

ラグルスの面々は茲に至つて、一齊に、

エー、おべいて升。

と怒鳴ると、母親は、少し、ぢれ込み、

おめへらあ、知つてるとかへ、おめへらにさういへッて、言つてやしねへよ、セイラにいへッてたんだ。

ラグルスの面々は、何れも首を縮め升た。それで、今度は弱い音を出して、たゝ

ハイ、ハイ。

といひ升た。

サア、それじやァ、みんな立つて、やつて見ろ………セイラは、はつきりと、口ィきゝナ。

セライの舌は、どうやら、口の裏へシッカリくッついてしまつて、一寸には物がいへませんかつた。

サア、早く！

かあやがいつたんです………アノ………アノ………あんまり、暖たかい帽子だから………アノ、近い處ヶ家へ置いて行つた方が好ッて。

とセイラが、死に物狂ひに、なつて漸く暗誦いたし升た。かふ聞く子供等は、堪りかね、下任みに抱腹する勢が并らんだ一列の人々を地震と搖り動かし升た。

お袋は力を落して、溜息をつき、

おめへらァ、どうしたら好だらうなァ！そんならやァ、口うつしに、おせいて遣らずばなるめへ。

といつて、一言〳〵、セイラの合點の行くまで敎へ升たから遂にセイラは、さちほこ立をして居て、倒まにでもいへると思ひ升た、

サア、コーニリヤス、おやま、お客にいつて、何てつて、主人の機嫌を取る積りだ？

おれかへ？、知らねへ。

とは、青くなつての答へでした。

おめへ、まさか、そけへ、丸太ァ轉ろがした樣に、人の物ヶ貰つて食ふまへに、グーの音も出さずに、ブッ座つてたんじ

やァ、濟むめへ？、ヤア、ベードの奥さまに、「いつも御機嫌よふござい升か」とか、旦那樣の御商買は御繁昌ですか」とか、「かふいふ時候はお躰にどうでござい升」とか、なんとか、いはなくつちや、いけねへ――それじやァ、モウお膳に坐る段になつた分にしよふ――さふなれば、するとが出來るから、さう諦りのわりいとはねへ。なんのかんの考へたり、鹽梅したりして、話しィしてる中が、面倒だ――膝掛ィ出したら、セイラから、ピオレまでは、膝の上へ、載せるが好い、あとの少なァ、胸ンとこらうへ掛けて、首ンと、けィ挾むが好ィぜ、手で摘むじやねいぞ、人の皿のものォ横どりするなよ。手ィ伸ばして、弁らべてあるものを引ッたくるなよ、「おあがんなせィ」つていわれるまで待つてるもんだぜ。そんで、いつまでも、食へッていわねィつッて、引ッたくるもんじやねいぞ。お膳の上へ何も翻すもんじやねへ、そんなことォしたら、奥さまが、追ん出してよこしなさるかも知れねい、…………そんな粗匆したら、追ん出されても仕方がねいンだぞ。（スーザンや、おめへ、ピオレが鼻ァかみてい時借りられる樣に、膝の上へハンケチィ載せておきな。ピオレも鼻液が出た時はうつかりして居ねいで、さつさと借りて、かまねいと承知しねいぞ…………チヨッ、どふせ、氣のつくこつちや有るめへけど）。サァ、これから、どんな鹽梅だか、ちつと、稽古して見よふ。「クレメントさん、おまへさん、リランペレ、ソースウおあがんなさるか？」

食ふとも、なんとも！

クレムは、前後の込み合ひで、篤と樣子が呑み籠めず、此問を平常、うち〱の話しと間違へたのでした。

クレメントさん、おめへ、お客にいつて、さふいふ言葉ァつかうていのかへ？、サアモウ一度、遣り直しィして見な。「クレメントさん、リランペレを少しおあがんなさるか？」

へイ、ありがとう、そけいらに、ありさ、吳れて、おくんなさい。

上等だ！そんでも、今夜は遣り直しなんかはねへよ。よしか？「ピオレさん、白い肉にしませうか、黒い方にしませうか？」、

色はどつちでも好うござんす。誰ァれも食べねへので、あ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

たしは澤山。

と。ピオレが、様子を造つていひ升た。

それァ上出來だ、それより甘かァ誰にもいへねへぜ、「キテさん、おめへさん、菓子へ薄い方の汁ゥかけ升か、濃いのにしますか？」、

薄いか濃い？、アノ、兩方少しッつおくんなさいまし。

と、キテはしなよく、一寸お辭儀をし升た。すると、他の子供たちは馬鹿にして「ヤアイ〳〵」といひながら、指をさし升た。ピータアなどは、食しん棒といわぬ計りに態々ガッついて食べる眞似をして見せ升た。

ピータアはそんな眞似ィしるな。それァなにも、食しん棒といふ譯じやァねへ、それで、何にもわりいこたァねへンだ。何でも何をいふッても、いひ様だから、みんな覺えて居ろ。イーレや、ラレは、躾ィするッて、余り少せいから、兄や、姉見ていて、眞似ィするより外ァ仕方がねィ。それからはまだ何かあらうかナ？

ピータアは、少しく鬱悶加減で、

かあや、おらァ、まだ、モット、行儀ィをせいるていなら、モウ滿腹になつて、食ふ氣がしねへぜ、食わねへ中に、行儀計りで、腹が張つちまつたァ。

コーニーリヤスは合槌打つて、

おらも、さうだ。

お袋は、少しく冷笑の氣味に、

それァお氣の毒様だ、これん計りの行儀で、お困りなすつちやァよつぽどおよそいんだ、それで、セイラは、御馳走が濟んだら、好加減の時分、セイラが立つちやァ、「モウ歸りませうッて、」さういわねへじやいけねいよ、それで、「イ、ヤ、今少しおいでッて言つたら居ても好が、なんともいわなければ、歸るんだぞ、よしか、それァ呑み籠めたか？

好加減の時分といふ時分ほど、六ケ敷刻限はないので、セイラもいよ〳〵興をさまし、悲しさうに、

なんだか、あたし、けふの御馳走が頭の上へすつかり、載つかつてる様で、堪らないよ、自分ばかしの行儀なら、まだ好けど、九人前の行儀ィ氣をつけなつていふンなら、あたし、うちに居る方が、よつぽど好や。

お袋はなだめて、

いゝさァ、心配すんなよ。子供は子供だから仕方がねへッて、勘忍して呉れる人計りなら好がナ、誰がこんな行作ァ知らねへ子供ヲ育つたッていわれると、悪りいからナ――モウ五時に十五分過ぎだから出掛けるが好い――帽子のことチ忘れんなよ――みんな一時にしやべるなよ――スーザンや、ハンケチをピオレに貸て遣んナ――ピータアはそんなに胸止ィいぢるなよ、見つとむねへ――コーンリアスはそんなに腑んで居るなよ――セイラはラレを眼ィ離さず、見てろ、ラレは姉さんの言ふ通りにするんだぞ、それで、何をすればつて、お袋の里はムッググリルスだッていのを忘れんな。

家政

小兒の言葉

けい子

凡物は、いひやうにて、優さしくもなり、憎らしくもなり、堅らしくもなり、柔らかにもなり、上品にも見え、下品にも思はるゝものぞとよ。勿論言葉は、思想をいひ現はすもの、心ねぢくれて言葉正しからむやうもなけれど、世には心正しき人にして、言葉ゆゑに人に憎まれ、人に笑はれ、人に輕視まるゝ人も、少なしとなさゞるべし。之を思ふに、言葉の練習は誠に大切にして、文辭に巧みならんよりは、寧ろ言語の正しき方、日常の場合に於て、蓋し數等の上に在るべし。然らば、之を練習するの法を如何といふに、人生れて此世に出ると共に、先づ父母食物などの名を始めとして、知らず識らずの間に、何時しか千百万の言葉を覺ゆるものなれば、之をして優美に、高尚に、將又明瞭ならしむるには、小兒の中の父母の注意こそ肝要なるべけれ。男にしては、假令ば公衆充滿の席に於て、滔々たる演說、能く万人の心を動かし、其をして泣かしめ、踊らしむる。女にしては、對話應答、淸らかに麗はしく、自ら氣高うも奥床かしうも思ひなさるゝ、重に皆小兒の中の練習如何に、基く事ならむかし。殊に未だいはけなき、又は少し物心付きて跳り狂ひなどせるが、下卑たる淺猿しき言葉遣ひは、自ら可愛氣の褪め、憎らし氣の添ふものなるをや。父母たるものゝ心すべきことにこそ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

一 父母

幼き中は、父母ほど、尊くも嬉しきものはあらじ。中にも父は、怖くして尊とく、母はやさしくしてなつかし。去れば男にしては、父を行末の鑑とも模範とも思へど、日頃馴睦むは母なり。女は素より母を手本ともすれば、父が平素穢げなる言葉を遣ふまじきは、言はでものことゝ。母の言葉を愼むべきは、尙一層に重し。下司の子が下司の言語を遣ひ、上﨟の子が上﨟の言葉を遣ふを見れば、實に人は氏にこそ育て。幼き中の百感に鋭敏なる、聊かの善事も、染め難からぬ代りに、塵程のこみも、又忽ちに映るのみならず、其映れるは、恰かも寫眞鏡に照ぜしが如く、永く其影を留めて磨滅すべからざるなり。父母たるもの、兒童を寫眞機と見て、常に其姿を寫すと思はゞ、大過なからむかし。

二 守兒

守兒に雇はるゝもの、大方は生れ賤しき者に限れり。生れいやしければ言葉も賤しく、小兒の爲めには、誠に恐るべきものにてありながら、其任はと問へば頗る重く、之を第二の母といふも誣言に非ず。換言すれば、幼き中の一切萬事の敎師なり、指導者なり、去れば兒守の言葉の早速にも少兒の言葉となるは、是非もなき次第ゆゑ、若小兒の言葉をして正しからしめんと欲せば、先づ能守兒其者を敎訓して、其言葉を正しうせしむべし。去る夏、星が岡の森の邊りを過ぎりしに、大木立隈なく風そよめきて、涼しさの忘れがたきところに、大勢の守兒、永田町邊りよりや、集ひたりぬべし。人目なきまゝに、己が主人の幼兒は、腰掛の上に打置き、互に生れとこ爭ひぬ。穢なげなる言葉掛合ひつ、果は毒つき罵り合ひて喧嘩などぞすめる。純潔なる幼兒は、之を目前に見もし聞きもすれば、何時しか其言葉のうつりもすべきを、父母なる人は知らでやは在すべし。誠に打わなゝかるゝ事共なり。守兒など置きたまふ人、目届かぬ邊りの用心、ゆめ怠りたまふべからず。

三 朋友

小兒は、物の染付き易きものなるが上、又甚だ好奇心に富めるものなれば、若其朋友の中などにて、面白く可笑しと思ふことをいふ時は、直ちに其が眞似をなし、果は其をこならして己がものとぞすなる。殊に早朋友をも求むる頃になれば、半は

其感化を受け行くものなれば、勉めて口穢き朋友には、交はらざるやう心すべきとなり。方圓の器といふ言葉、古けれども、強ちに捨つべきにも非ず。

四 學校

家庭に於て、折角明らかに美しう養ひなしたる小兒の言葉を、一朝學校にて打毀はさるゝは、往々ある習ひにて、父母は流石に口惜しうも淺猿しくも思ひぬべし。是學校はさま〳〵の階級の小兒、一堂の下に打集る所なれば、是非もなきことながら、敎師の注意も肝要なると共に、父母も亦小兒の爲めに、學校を選むべき事なり。況んや學校にて覺えし事は、小兒は其善惡を見分くるの能力に乏しければ、只一圖に其を善き事とのみ思ひ取りて、父母の敎訓も、倘聞分けがたき傾きあるものなるに於てをや。

結論

斯くして萬障を排除して、小兒の言葉の練習を、常に正しきに保たしめば、言語明晰、高尙、優美、其等は自然の結果ぞかし、思へ言語の範圍は極めて廣く、人は寸時も言葉なしに在り得ぬのみか、言語は風采の上にも、其大部を占むるものなるとを。

つれ〴〵草

獨居記 （某女史への消息）

其一　　小日向生

下宿ずまゐのあまりにうるさければとて本月の始め小日向臺なる淸巖寺坊にうつり申候寺のまはりには森あり、藪あり、桑畑ありて甚閑靜に御座候、茗荷谷隔てゝ向へる岡に馬病院ありてそのあたりにちゝの木高く立ち左手に火藥庫の雷よけ鉾をそろへたらんが如く木立ちの上より見ゆるなど中々に興ありておもしろく、西の方は音羽の町を挾て目白の岡に向ひ夕附日不動の森に沈みたる上より富士の峯の半ばうすむらさきに現はれたる、護國寺の晩鐘の暮烟に包まれて靜かに響きたる、賤が家の軒に板たて連ねて水引つくりて乾したる何づれも其まゝ畫にもかゝるべく歌にもよまるべくと存候、松虫、蟋蟀虫多くなき候、後ろの林に栗、椎などの木繁りあひて夕風わたる毎に其實のはら〳〵と音して落つるなどさびしけれ

ども嬉しく、月いと明き夜庭に下りたちてそゞろあるきして今様などうたひ居候ひしに松琴子ゆくりなく訪ひ參候ひしかばいかにしてか尋ねあてつると云へば道とふ人もなくて困じはてしをりから君が吟誦の聲のもれければなど申候これもおもしろく覺え侍り候尙秋色加はり候はんにはとりどりの興有之べくと存候、九月十四日。

其二、

寺の軒に幾千とも數知れぬ熊蜂茶釜ばかりの巢を造りて、住ひ居候ある日此蜂の仲間のいたずらもの住僧のかしら刺し候ひしに住僧大に打腹立ちて夜の間に棹もて巢の大半をば打こはし候其あくる日より蜂ども大に噪ぎたちこの報いせんとて住僧をば窮追いたし候ひしかばほとほと困じはてゝ兩三日が間蚊帳つりてひそみ候ひきいとをかしく覺え候さてこはされたる巢は黽勉修復して今は大かたもとの形にかへし候」

九月十八日は國にて身まかりし正文女史が一週年にあたり候ひしかば寫影とり出でゝ心ばかりの手向け致候、をりふし秋雨ふりつゞき候て庭の白萩しとゞに濡れそぼちて咲きみだれ候へるを折とりて捧げつゝ

白萩の花にたまれる白露をそふるは己が涙なりけり

たむくとて折ればかつちる白萩の花の雫にぬるゝ袖かな

などひとりごち候て懷舊の涙をすゝり申候

ある日浴してのかへるさ服部坂にて十四五才ばかりの盲人に遇ひ候ひぬそが母ならんと思はるゝ女の、妹なるべし五つ六つばかりなる兒を脊負ひて脊より兄の手を曳かせぬ、盲人は淺黃色の袴つけて、襟に盲啞學校の記章かけたり兒、兄に向ひて學校にて學びつる歌うたひてきかせよと云へば何やらん小ごゑにてうたふを母かへりみて打笑みぬいとあはれに覺え候ひき、十月六日。

其三、

栗の實も椎の實も落ちつくし候ひぬ今は虫の音もたえだえになりてをちこちの尾花も狼籍の姿にかはり鵯の鳴音のみ時を得顏に聞え候かの桂園人が

こともなき野邊を出でゝも見つるかな鵯のなく音のあはたゞしさに

の歌の妙味をば始めて感じ候ひぬ

菊の蕾漸くふくらかにて楓ならぬ木ずゑもやゝ夕日に匂ひや

うになり侍り、あるあしたあたりの小みちをばそゞろあるきし侍りしに、とある垣根よりさし出でたる櫻のさえだに二つ三つ覺束なげなる花の見えゝひしかば

　このごろの小春日和に小日向の岡の櫻はかへりざきせり

など口ずさみ候ひき

馬車めきたる喇叭吹きて來る豆腐屋、すてえしよんめきたる鈴ならして來る豆や、これらに朝ゆふのものをば辨じつ不自由ながらも心靜かに文よみてくらしつるこの獨居のたのしみをば世間狂奔の徒いかでか解し得べきと中々に得意に御座候、十月廿八日。

十二月をよめる今様

採月女史

一月

山路の雪は消えやらで。まだふる年のまゝなれど。霞める空に春は見ゆ。若葉つみてん野にいでゝ。

二月

野べの若草もえいでゝ。山の櫻も咲きいでゝ。雲雀の聲も鶯も。あはれ長閑に聞ゆなり。

三月

春やゝ末になりぬれば。木々の梢もちりにけり。朝夕きなく鶯は。花に名殘を惜むらん。

四月

池の藤浪さきにほひ。岸の山吹底清し。春にわかれしうきとも。しばしわするゝ心地して。

五月

軒端にかをる菖蒲草。垣根に匂ふうつぎ花。五月雨しきる夕暮に。山時鳥なのりゆく。

六月

岸にくひなのなくなるは。なれも月をやまつならん。夕風かよふ川づらに。あつさを流す舟あそび。

七月

庭の荻原音たてゝ。雁がね空に渡るなり。たなばたつめのまちし秋。今朝よりしるく見えにけり。

八月

吹きくる嶺の松風に。鹿のなく聲きこゆなり。野邊の薄にまねかれて。月こそのぼれ松の上。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

九月

紅葉は早くちりしきて。菊のみ時を得顔なり。露やゝ寒き草むらに。なくなる虫もかれ〴〵に。

十月

時雨をはこぶ夕嵐。木の葉ちりしく夕まぐれ。とひこむ人はとひも來よ。庭のにしきをふみわけて。

十一月

庭の落葉は露ふかく。筧の音もほのかなり。今朝は寒さのつよければ。埋火をのみ友として。

十二月

こよみの軸の近づけは。ふる白雪ともろともに。我年さへにつもりなん。思へはかなし年の暮。

雜録

本邦女醫の由來及其前途（上）。

荻野吟子

温故知新は學ぶものゝ本領なり。今や予は本邦女醫の既往に遡り、推して前途に望む處あらんと欲す。思ふに萬般の學漸く日進隆運の時に際し、特に女子と實業なる問題世人の視聽を惹くの今日に於て敢て無用のことならじと信ず。

少名彦、大己貴命ありて以來、神ながらの醫道は彼の容易なる療病禁厭の法を以て數百年をけみし、降て欽明の朝に至り三韓の醫道は其十五年に、漢土の醫學は同三十三年を以て引續き渡來せり、孝謙の時に及んで漢醫の道大に隆盛を極むるや、爰に始めて神、韓の兩醫道衰退の運に遇へり。已にして文武大寶の初年に當り、令を發して醫の學規を定め或は人を漢土に派して、斯學の繁榮を將來さしむるが如き、世は實に此の港頭まで漕着せり。

事態斯の如くして數十年を經たり。而して元正の御世とはなりぬ。之を女醫の歷史上、大字特筆すべきの紀元とす。

元正は文武の姉君にておはしき。予は今詳かに帝の性行に付て窺ひ知るを得ずと雖も、見よ、かの漆部司の一官人家計に窮して罪を犯せしとき、其子三人奴となりて父が命を償はんと請ふに、法一人の爲めに云々といひて之を放ちやり玉ひし

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

が如き、時に或は鳳輦、美濃に幸して飛瀑萬丈の下、甘露を結ふ一樵夫を見そなはし之を養老と改め給ふがとき、要するに柔和仁慈、忍ぶ能はざるの君たりしや明かなり。帝既に斯の如く多感多涙にして必竟女性たる特性を圓滿に具有し給へり。女醫の必要起れるもの蓋し宜なる哉。

今や一歩を枉げて此を他國に求むれば、前漢の孝宣帝の時の執權鶴光の夫人其女を後宮に納れんが爲めに、女醫を用ゐて云々といふことあり、唯其後に於て之れが消長を詳かにする能はずと雖も、顧に當時漢土と我國に於ける關係は、恰も十餘年前の日本が西洋各國に於けると一般文物風俗一として其跟跡を踏み之に倣はざるものなきはなし。故に女醫なるもの又例を彼にとり以て、天性忍びがたきを忍ぶの憂ひなからしめしか、將た單に必要は世を驅りて遂に爰に至らしめしかは、いまだ知るべからずといへども、兎に角に史の傳ふる所を以て考ふれば、當時女醫博士なるものあり、官家伶悧の女子七名を撰擇し、內待所の側らに別室を設け博士これに口授し、三年にして業卒るや人躰中隱秘すべき部分の鍼針灸點を司らしむ云々と、是によりて之を觀れば當時、單に大內にのみ行はれしに過ぎざるか、而も場所を內待所の傍らに定むるが如きに至ては、斯學を目する如何ばかり神聖なりしかを知るに足らん。要するに我國女醫の濫觴は斯の如く、神聖嚴肅に成立せるものゝ如し。

爾來醫學の大勢を考ふるに、嵯峨の治世漢方醫道いよゝ其隆盛を極め、爰に千歳の礎を置けり。其後數百年大醫四方に輩出し、各一家の說をなすに至れり。永觀中醫心方源病候論の說普く一世に行はれ、南北朝の比ひ和劑局方滿天下に其羽翼を張れり、或者は金の李朱塡及元の朱丹溪の法をとりて、名聲群儕を壓倒し、或は則を扁鵲仲章によりて、各門下無數の俊傑を出せりといふ。

今を距る百六七十年前、享保年中長崎の人西吉兵衞、和蘭陀人に付きて大に醫學を修む。幕府之を納れて官醫とす、西洋醫の我國に行はる、蓋し之を以て嚆矢とす。寛政年中前野蘭化蘭學について大に內外科を硏む、弘化嘉永の時の勢ひ破竹の如く進歩すと雖ども、いまだ蘭學の一に過ぎざりき、既にして世上の風色忽焉として變じ、文久元年とはなれり。修好の吏は歐洲各國に入らんとす、時醫師川崎道民奮て之に從ひ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

廣く斯學の奧義を極めて歸朝するや、日新醫學の今日あるを致せり。

醫道の沿革槪ね斯の如し。或は謂はん元正以後殊更に女醫に付て傳ふる所なきは如何と、然れとも諺にいわずや、上の好む處下必ず之に習ふと、且つ夫れ女子が男醫を憚るの情は、敢て高貴至尊にのみ限らず延ひて民間に及べるもの丶如し。況んや前述の如く醫道の勢力は日進月步の姿なりしをや。歷史の之を傳へざるもの蓋し故あり。思ふに多數醫師の內面に探り及ばゞ必然其父其夫の名義の蔭に隱然其術を試みたる妻女あるは、疑ふべからざる事實なり。否寧ろ古來大家を以て任ずる醫師に付き子細に之を調査せしならば、內に然かあらしめたる潛勢力ありしを見ん。請ふ見よ、千代萩の演劇に於て大場道益の妻小まき畢竟當代の小兒科醫たり。近くは產科シーボルド氏の女、いまも長崎に其父の業をつけり。且つや醫の妻女が藥劑士を以て自任せしにあらずや。是によりて見れば日本の醫學は男子一己の手によりて、發達繼續せしにあらず、何となれば彼等は腹心忠實なる助手の爲めに、其短處を補はれしもの丶如し、何ぞ夫れ多幸なる哉。

夫れ維新は我國第二の革命なり。鬱積沈滯せる舊慣、頓に破れ光輝燦たる文明は玆に現れんとす、醫道の旣往を一觀すれば豈世と共に推移せるものならざらんや。漢法來りて皇醫の道衰へ、西洋醫學の渡來は恰も明治の革命と時を同ふするのみならず、諸々の文明に先立ちて新智識を吸入し以て國民の智識の開發者となり、彼の開港を促し彼の交易を圓滑ならしめたるが如き、醫學が間接に世を益したるを以て知るべし。維新の革命を暗々裏に催促喚起せし醫學が第二の革命は、其大變の時機に際し更らに一新現象を呈せり。卽ち多年胚胎し來れる女醫は、其獨立を得るに至れり。之を明治十八年の事なりとす。

當時旣に其門を開きて女子の就學をゆるせしもの二、曰く好儒醫院、曰く成醫學校、然して此年に至りて更らに其講席を女子に分ち以來、多數の女醫を輩出したるもの之を濟生學舍とす。幾千もなく前二校其門を鎖すや、東京醫學院又之に次きて後進を誘液せり。

爰に卒業女醫の總數は、旣に十七名を以て至る所に其業に就けり。而して現今斯の學を修むるもの殆んど六十名にたらず

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

といふ、醫學に於ける女流の前途豈又多望ならずや。

予は更に一歩を進めて今日の世が、女醫に對する狀態如何を觀察し、更らに希望する處を述ぶることを得せしめよ。

おつかさんは只おつかさん

八字髯のをぢさん、或日、近處に顏を見知れる十四才の童兒と湯歸へりの道づれになり、長者たる特權振るふて、さま〴〵の問ひを試みたり。

八字ひげ
　おまへさん、毎日何處へ行くの？

童兒
　僕ですか、僕はネ、毎朝、製藥課へ、

八字ひげ
　へー、製藥課の仕事をしてるんだネ、朝は早いかへ？

童兒
　早いッて！家のおつかさん、四時半にャモウ起るんです、おまんまが出來ると、おとつざんを起すんです、それから、おとつざんがおまんま仕舞つて、砲兵へ出てく時分にやア、モウ僕ら起すんです、早いから、寒くつてネ、

八字ひげ
　御膳拵らへは姉さん達が手傳ふンだらうネ？

童兒
　ナニ、姉さんたちは、製紙部の仕事に出て、朝つから晩まで稼ぐんだからッて、おつかさんがなる丈、寐かして置いて、みんな一人でするんです。僕の持つてくお辨當おつかさんが拵らへる時分漸く起きて、顏洗らつてまさア、

八字ひげ
　へー、それで。おつかさんは誰の仕事するんだへ？

童兒
　おつかさん！おつかさん、誰の仕事もするもんですか、おつかさんは、只だおつかさんでさア。

母は、家內中の重荷を負ひて、家內中、其重荷を知らず。働らく人はたゞ戶外にのみありとして、戶內に働らく人の爲めに尤とも多く働らく一人あるを忘る。

空氣に包まれて、其物在を知ず、干ばつの時、始めて雨の効能を思ふ。人の情の薄きよ、實に斯の如し。無量なる慈母の思に

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

報ひ、我等が負わせ來りしいふ可らざる重荷の幾分を擔ふも、其けふを過さば、恐らく明日は天の使來りて、其屈める腰、其倦となかりし瘠たる手を休めんと、永遠の安息に誘ふべし。

萬斛の感慨は此卑俗なる一短句に籠れりとおもふ。

　孝行の仕度時分に親はなし。

書架

○日本地名全書

山田美妙齋の著にして、此度び其第一卷出でたり。名所古跡の地誌を專らとして、五畿内に名ある所ろを悉とく記載す。昔し名所圖會など云ふ面白き書物はありたれど、何れも大本にして携帶に便ならず、然るに此書の躰裁頗ぶる簡易にして所云る袖珍となすべし。旅にあかして名所をさぐらんと欲する人々には此上なき重寳ならんか。

　時は秋、よし野をこめん旅のつと。

○古今史譚

讀賣新聞に、樂貞子、後凋生となん呼ぶ、二人の歴史家あり。古を知ると、今の如く、史を樂むと、花に於けるが如し。綿々縷々として、讀賣新聞紙上に引出し寫し出す昔し物語りは、史談あり、史論あり。逸話あり、逸事あり。面白きと比ふべからず。新聞紙一日の壽命と共に夢跡に入らしめんを頗ぶる殘り惜しと思ひしに、此度び編輯せられて「古今史譚」と名のり、其第一卷世に出でたり。慶安由比正雪、雁金文七等の罪案、天海大僧正の蝶咄を初めとして、小野おつうが事蹟、並におつうが書簡、天一坊の實説など、分けて面白かるべし。願わくは「徳川時代大奥の勢力」なども、追々第二卷中に編入されんとを。

○婦人矯風會雜誌

去二日其第一號出づ之を最初の婦人矯風會雜誌に比ぶれば、驚ろくべく、歎美すべき成長なる哉。欄を、社説、寄書、譚の花、傳記、所感、雜錄、看護談、家政、畑の樂しみ、料理百種、小供の談、雜報の十二に分ち、平易通俗のうしろに凜然たる矯風の精神を含み、言々遂に改良改革を希望せずと云ふとなし。本號に於ける、大學病院看護婦の弊、横濱の不正婦人、貴婦人の儔を乞ふ、諸篇の如き、眞とに是れ光芒十丈の觀ありと言わん。

○産婆

全國を通じて四五万の産婆あり、十六七の乙女も尚ほ産婆たるの今日、此種の人々の特別の器關なかる可らず。今ま其名に稱ひたる此雜誌の第一號を見るによく此望に適ふものと知らる。論説。雜纂。雜報、みな有益なり。また附錄として、産婆學講義錄を添ゆるは、此道の人に取りて分きて益あるべし。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

逸事

○山本覺馬ゼンスに一生の覺悟を問ふ

元の熊本英學校教師たりしカプテン、ゼンス氏、此度び西京高等中學の聘に應じて來る。同志社出身として名ある當今第一流の組合派諸教師は、概ね此人の化育を蒙むりたり。新島襄氏に對しては、寧ろ友人たり共力者たらん、ゼンス氏に對しては、眞とに感化を受けたるなりと言ひ居る人も多しとぞ。西京の逸物、故山本覺馬氏、ゼンス氏が米國に歸らんとする時、一生の覺悟を問ふに、曰く、人間一生の心得に四ヶ條あり、第一に富人とならざる可らず、一也。富人となるには、才智を要す、故に才智を得る爲の學問をすべし、二也。さて、富人となりたる後は、貧人と交わり、貧者の生活を爲すべし、三也。而して、其金を、神の御爲に遣ふべし、四也と。

○新島襄、同志社の礎に二言を遺す

新島襄氏、同志社學院の爲めに百年の言を遺して曰く、我學院の爲に常に、心に銘して忘る可らざる事三條あり。一、我等の礎たる基督。二、良教師。三、精良なる器械。此三のものは、我校の光なりと。

○氷川老伯大に畏愛す

漫罵の舌の根は、熱誠の腸より出で、冷嘲の眼ざしは、后ろに万斛の涙を含む。奇權多畧と見ゆる氷川老伯が、傾載して措かざる所ろのものは、小楠の王道、南洲の至誠なり。近ごろ、翁が尤とも畏愛する所ろの人は、江州の豪商塚本甚助氏なりとぞ、此人、家に百万の富を積めども少しも驕らず、外見、朴として一の野翁に似たり、身に奉ずる所極めて薄くして、國に奉ずるの念頗ぶる厚し。其六十年の賀に際しては、所有の山中に、櫻樹千株を植えて曰く、貧民は役々として嵐山に花を観ると能はず、故に聊さか公衆の觀覽に供ふと。氏ことし六十八、七十の賀亦近からんとす、則はち勝伯に謀りて曰く、七十年の賀として十万金を献納し治水の業を助けんとす如何んと。老伯大ひに之を賞贊し他に許して曰く、日本國、彼が如きもの三人あらば大丈夫なり、と。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

時報

◎學校、教育

●伊豫國今治に於ける女子教育　今治は伊豫國越智郡の海岸にあり、昔は久松氏（今の子爵久松定弘君の祖先）松山侯久松氏の分藩として爰に城き世々三万五千石を領せし地にして現今戸數二千九百二十九戸、人口一万四千二百三人（明治廿五年十二月卅一日調）を有せる一小市に過ぎざれども商賣の繁盛なることは伊豫國中の冠ともいふべくして瀨戸内海中の一要津たり、而して此地は早くよりして基督教を容れて明治十二年には既に教會の設立あり、十五年には壯麗なる會堂建築せられて巍然たる塔宇は高く海岸に雄視し其頃には敏腕なる横井時雄氏之を牧して關西に一二を爭ふの大教會となり今日猶四國の基督教をいふ者先つ指を爰に屈するに至りたり、この一小市の今治が基督教に大勢力を假したるときよりして會堂の塔宇よりして鏗々と響き渡る正午の鐘聲は一般住民の心眼を醒起して一大動機を與へ其動機は大に女子教育に發して現に他鄕に出てゝ高等教育を受けて卒業したる女學生、廿有一名の多きに至りたり、其卒業生の姓名と屬せし學校其父兄の職分とを擧くれは左の如し

神戸英和女學校高等科卒業生　十一名
商、増田つる、商、柳瀨さよ、同、同　しな、同、同　ひろ、同、同　しづ、
同、森きくよ、同、重見みつ、同、村上なか、同、阿部ちよ、工、竹友うめよ、
同、中谷ゆきよ、同校普通學部卒業生　二名
商、藤本せつ、工、中谷すゑ、右二名は現今同校高等科にあり、
同志社女學校卒業生　二名　醫、重松ちかよ、無、豊田くに、
明治女學校普通科卒業生　一名　商、矢野さもよ、
大阪高等女學校音樂部卒業生　一名　商、越智はな
山陽女學校卒業生　一名　醫、菅　ひで、
松山女學校卒業生　三名　商、増田いし、工、矢野房代、工、土岐いそよ

現今猶他鄕に出てゝ教育を受けつゝあるものまた多く、松山女學校の如きは今治人其半を占むるが如く其寄宿舍の如きは松山市中に今治人の一團躰ありといふも殆んど不可なかるべし、夫れ僅に一万有余の人口を有せる一地方にして廿有余名の高等教育を受けたるものなるは全國中蓋し今治のみならんか、異數といふべし、蓋しこの盛なるを致せしも全く基督教に負ふ所にして彼等卒業生は僅に一名を除きて（此一名もまた基督教信者なり）他は信者不信者を問はず悉く基督教主義の純潔なる教育を受けたるものなり、今治の地素より海岸にあるを以て腐敗の空氣に充滿せりとはいへども、其中心には純良なる麵包種あれば他日爰に大に改良を見るを得べし、また彼等卒業生たるもの其責任の重きを知らば必ずやその改良を計るに怠らざるべし（松山人某報）

◎集會

●大日本婦人教育會の慈善音樂會　毛利公爵夫人鍋島侯爵婦人等貴夫人方の組織に係る大日本婦人教育會にては先きに中等以下の女子を教育するの目的を以て女紅學校及小學校（無月謝）を設立せしが目今生徒の數八十餘名に達し益々好結果を得るの望みあるを以て一層事務の擴張を計畫し校費補充の爲め去る十一日小石川砲兵工廠内の後樂園に於て開けり、來會の貴女紳士千以上に及び甚だ盛會なりしと

●後樂園の懇親會　大日本婦人衞生會の秋季懇親會は去六日小石川砲兵工廠内後樂園にて催せり會長土方子爵夫人副會長濵尾夫人以下事務員は朝來會場に詰め定刻に至て總裁小松宮御息所殿下にも臨御あらせられ續て會員の夫人令孃及び諸紳士等踵を接して參集し開會の式終れば餘興として薩摩琵琶淨瑠璃等の催ありて盛會なりし由

●大坂婦人慈善會　去る十一十二兩日の同會は中之島淀屋橋北詰なる土居氏の邸に於て煎抹の茶席を開き諸家珍裝の繪畫及び美術品を陳列して觀覽に供し庭園には能狂言或は滑稽噺摸擬茶店等を設け和氣洋々として隨意に歡を盡し去りたりといふ

●米國婦人教會　去る三日高田新井町別院大廣間に於て開會せり會場の正面には天皇陛下の尊影と釋迦牟尼佛とを安置し香を薰じ挿花を供へ裝飾嚴肅を極め數名の演說等もありし由（高田新聞）

◎美談

●一滴同情の涙　去る頃朝野新聞社員天涯子は王子瀧の川の「孤女學院を訪ふ」と題し同新聞に掲載せしが去る十七日一婦人あり同社の受付に來り一封を出しコハ妾が主人より孤女學院への寸志何卒御取次ありたしと五十錢と左の一札を置き去りしと

貴社新聞拜讀致し孤女學院の模樣御聞取被下御嬉敷わらはには兒女數々有之我身もし早く世を去りなば殘る子供等は如何なる事ならんとつれに苦心いたし居候折柄孤女學院の事承り世にはかくまでじぜんなる御方の有ものかと我身も忘る斗りに嬉しく世にはかなき孤女方のためにぎゑんあらん事をねがふ貴におわす御婦人方よ孤女のためにぎゑん致度候得共心にまかせず富

十一月十七日　日本橋　貧女

●賞金下賜　神奈川縣廳にては去る十日付を以て貞婦山崎ためが志行を賞し金員を下賜せし由其賞狀は左の如し

相摸國津久井郡靑野原村井上さら母山崎ため

資性篤實能く姑に奉じ夫に事へて孝貞を竭し其疾に在るや窮乏を意に介せず看護懇切具に至る明治廿年十月夫逝き姑亦瞑すと雖も滋々奮勵姑に奉し孤に省み產を收め志行變ぜざるを玆に二十餘年一日の如し洵に奇特とす仍て其賞として金四圓下賜す

●幼稚園主の賞與　私立福島幼稚園生大目立梅代子に付添て毎日同園に來る新井すみ子と云へる少女の品行方正にして婦德を事するのまめやかなるを賞せんとて園主草野喜右衞門氏が針箱に鋏を添へて之を贈與したりと（福嶋新聞）

◎風紀

●廢娼の建議　山梨廢娼會總代新海榮太郎勝格彌の兩氏は去六日縣廳に出頭して田沼知事に面會の上公娼廢止の建議書を呈し且つ二時間餘具陳する所ありたる由

●上毛の排存娼　去る十二日江原素六、三宅雄次郞二氏及び本社の編者は上毛有志者の聘に應じ前橋にて廢娼演説をなせり、聞くが如くんば存娼論者も諸所に集會し去る頃は安中地方に至りて演説會など開きしとか、今日諸所に於て廢娼の氣焰隆んに各新聞、各士人の賛同するに當り、獨り上毛の地に存娼を以て正理と叫ぶものあるは奇し。

●秋田市會の意見書　遊廓移轉に對する市會の意見書は去る二日の同會に於いて起草委員より報告せられる右は議長代理者より直ちに知事に上申するものなりと今之を抄錄せん（秋田日日新聞）

縣令第三十九號取消意見書

秋田縣令第三十九號は何の爲めに出てたる乎何の必要と自由とより現遊廓地を廢して下米町二丁目に移されんとするか閣下の意未た知らすと雖も該縣令の爲めに辨するもの說未た一も聞くに足らす或は曰くその繁榮を欝けしめんかためなりと是甚た非なり市の繁榮を望むの意は固に善し然れとも其手段は選まさる可からす市は假令へ衰ふるとも豈に斯る醜業に依賴す可けんや又遊廓の繁昌を安するは何事ぞ徒らに淫風を煽揚し風紀を亂るの業のみ苟くも風俗の改良を望まは此の如き醜業の廢絕又は衰頹を希ふ可し何ぞ其繁昌を欲すへけんや又遊廓繁昌は市の金融を補するの効ありと云ふと雖も是決して喜ふ可きことにあらす酒に耽け色に溺れ豪奢放蕩の浪費を促すは經濟を害する果して幾何ぞ且夫れ遊廓の年に衰ふるは盖一般生活の有樣と世上風俗の變遷と之れをして然らしむるものゝみ必すしも場所の如何に關せんや米町に移轉したりとて果して幾何の繁昌かあらん或は曰く米町に移せは依りて密淫梅毒の害を防くに足ると是亦た謬れり遊廓を近つけ公淫を盛にするの結果益々淫風を促さんのみ一方に淫風を煽して焉ぞ密淫を防くを得んや且つ密淫の盛んなるは他に因する所あり其因を破るの道は別に之れ有り遊廓に依りて此事情を破るに足らす矧んや密淫を制するは警察の任、他の力を待つ可きものにあらす或は曰く現遊廓地は不適當なり故に移さんとすと遊廓の如きは成る可く市區の中央より遠さけ往來稀疎地位僻遠の隅に居らしむ可し此點より看察せば米町と現遊廓地と市區の中央に孰れか接近して孰れか遠隙、何れか往來繁にして何れか疎孰れか便孰れか不便、何れか熱閙何れか寂寥なる乎は比較を竢たすして現遊廓地の優れるを知る可し且つや米町は將來市運の昌んなるに從ひ市內有用の要衝となるの望あり遊廓を置くは寧ろ惜む可きなり或は現遊廓地は國道に沿ふを以て躰面を傷ふの感ありと云ふと雖とも是豈に深く意とするに足らんや米町の如き要衝に置くこそ反て躰面を害せん假りに現遊廓地を不適當とするも果して永遠に取りて適當の地を撰まんとせは今は其時機に非す鐵道布設後市區の形勢を動かすや昭かゝ今日適當なりとして選むも將來如何に變するや知るを得す他日を竢ちて決するに若かんや夫れ現遊廓地を移轉せしむるの要無き此の如く而して風俗衞生經濟を害するの虞ある此の如し況んや當業者の多數も亦移轉を望ます却て其の困難を訴へて訓令の取消あるを欲す豈又た察する所無かる可けんや我市會が訓令第二十九號の行はるゝを見るに忍ひすとして遂に其取消を求むるの議を可決したるもの此意に外ならすと云々

◎片々

●美人でなければいけぬ　去る十二日大阪尋常師範學校內に於て開きたる大阪教育會常集會の席上にて教諭豐田文三郞氏は「大阪幼稚園に就て」といへる演題にて大坂の幼稚園に居る保姆は皆道頓堀邊にて法螺貝を吹いて擊劍長刀の試合をするといふ板額連計り多くて誠に不躰裁で成らぬこれから後保姆を採用するには容姿端麗沈魚落雁の別嬪を選擇するやうにして貰ひたい美人といふものは何となく恩愛の情も高むるものぢやかの裁判官が本邦古代の制に擬したる官服を着て威儀を正すのと同じ事だによつて保姆もこれに倣つて容姿艷麗なる美人を擇ぶのが必要ぢやと眦を下けて時々首を縮めてウツフ〳〵と笑ふ樣子が如何にも奇妙なりしとて市中一般の大評判なりといふ（明治新聞）

●安生堂產院慈善演劇　本所横網町の同院にては貧家の產婦救助の爲め去る一、二兩日歌舞伎座に於て慈善演劇を催ふし三階運動場には寄贈品販賣所を設けて慈善家の義捐を請ふ中々盛會なりしと

通信

◎西京通信

●去年京都府會にては女子部師範校存廢の議論起り已に危く見へしか幸に繼續することなりし今や又府會開會中なるが議員中にも女子教育の必要を認とめられし故にやかゝる價値なき議論の出つることなきは近來女學の好景の潮流か

●京都私立產婆講習會は從來多くの內務省免許及府知事免許の產婆を出せしか同會は夜學にて二日をき位に教授し卒業期は一ヶ年にて教員は有名なる東京の產科婦人科の良醫數名の有志にて成立ち日々盛大に趣く由

●京都教育會にては世の細君及母たる人に教育思想を普及せん爲め其方法を審査せる由

稻華生報

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

齒磨之大王

●品質最良芳香美粉なり

當時流行なる人造麝香入水おしろいにて美人となる至極適當の品なり

元祖
人造麝香入

定價金五錢

諸賣藥
化粧品 **問屋**

宮内省御用達 岳陽 小町水堂 本店 東京馬喰町一丁目 **平尾賛平**

●電話六五二番●

全國中無限の取次所あり

中川喜重編輯

萬國對照 國勢要覽 全

袖珍美本全壹冊　正價金三十五錢　郵税四錢

此書内國ノ統計ハ最近ノ統計年鑑其他官廳出版ノ報告ニ據リ萬國ノ統計ハ千八百九十二年改正增補英國統計學者「マルホール」氏著統計學書及千八百九十三年出版ノ「ケルチー」氏政家年表等ニ本ツキ凡ソ一國ノ形勢ヲ知ルニ必要ナル統計事項二百餘表ヲ類別編成シ每年項內外ノ對照一目瞭然タルモノニシテ政勢調査ニ多忙ナル今日ニ方リ殊ニ無類ノ珍書ナリ

發兌元　東京市淺草區茅町二丁目　**須原屋松成堂**

大賣捌

表神保町　東京堂
通三丁目　丸善商店
同一丁目　大倉
本材木町　林平次郎
表神保町　女學雜誌社書店
小川町　八尾新助
銀座四丁目　博聞社
表神保町　中西屋

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

驚くべき日本の大發明

●りうまちす病新藥發見　病理學の進歩に從ひ屢新藥の發明あるは我々人民貴重の生命をして長壽健躰に安居せしむる實に喜び限りなき聖代

りうまちす病新藥其藥劑原品は墨西其國より輸入する藥劑にして發明者は有名なる大醫陸軍々醫總監林紀先生にして此藥劑を配合したる丸劑は僂麻質斯病を根治全快せしむる耳ならず瘡毒かつけ病等も忽ち全快せしむ發明以來此藥劑を用ひて全快せし患者五萬人以上に達したり　岡田商店

りうまちす瘡毒かつけ參病は皆長病でありますて又難病でありますが、此發明新藥は一二年位の輕症患者は半劑九日分にして全快す　五六年は一劑十六日分十年以上は二劑服すれば必らず全快す

此新藥は根治療法にして後患なき發明藥ゆへ殊に外國人の賞用する藥により外人居留地に販賣店あり海外輸出店は朝鮮國京城泥甘號山口商店なり

藥名は克快丸といふ此發明新藥を購求しりうまちす瘡毒かつけの長病を根治全快せしめんとせば藥價の外送達料二錢を添へ郵便小爲替にて東京市淺草區なみ木町大通り東側順天堂藥房岡田支店と認め御注文あらば急送す

半劑金三十錢　壹劑金五十錢　貳劑箱入金壹圓之

岡田商店報

克快丸商店報

日本の美婦人 天賞湯

●海軍大軍醫石神六郎先生の發明せられたる天賞湯は婦人ちの道子宮病に用ひまして其根本たる病源を治し身躰をあたゝめちのめぐりをよくし子宮病其他婦人病を全治するは此新藥天賞湯に限る又産前産後に又月やく不順に皆服用して全治せざるなし　ナチリ等と云ふきず藥あります

壹袋七服入全國一般送料共金三十四錢

發明本店

東京市淺草區なみ木町大通り東側

順天堂藥房　岡田支店

關西特約

大坂市北區坪屋町二丁目九十六番地

克快丸準支店　津川音五郎

克快丸取次賣弘所之部

東京市畧表

兩國村松町特約	岩瀬長藏
同廣小路米澤町	大木口哲
日本橋區上槇町	安川榮次郎
同小網町四丁目	百草軒藥林
同代三町ふじや	島田理兵衛
同瀬戸物町同	玉置金八
本石町二丁目	森谷萬治郎
同大傳馬町二街	岩瀬出店
同馬喰町一丁目	平尾贇平
同同二丁目	岩瀬支店
同元大坂町	高木清婦湯
下谷池之端寶丹	守田治兵衛
京橋銀座一丁目	佐々木商店
同銀座二丁目	岸田精錡水
同三丁目萬金丹	松澤八衛門
牛込築土八幡町	尾澤良助
四ッ谷傳馬町角	永田義原
神田仲町記臆丸	山崎帝國堂
辨慶橋東福田町	ふいごや
本郷五丁目山田屋	高島文藏
淺草菊屋橋角	山田清兵衛

横濵市畧表

野毛町三丁目	栗原清八郎
同二丁目	杉浦藥舗
伊勢崎町二丁目	西海喜兵衛
同一丁目ひろ屋	櫻井久三郎
賑町一丁目	里見松泉堂
戸部町五丁目	室屋德藏
同一丁目上野屋	細野藤衛門
長者町六丁目	藤山孫七
元町二丁目藥舗	中村德次郎
同一丁目栗原屋	柿沼忠之助
同代官坂下角	竹生福太郎
同五丁目二天堂	田澤又衛門
石川仲町地藏坂	小林信治郎
石川町六丁目	田中熊治郎
同仲町六丁目	中井兼一郎
北方千代崎町	岡田誠之進

諸國の部畧表

肥前濵崎橋口町	廣川常太郎
備後尾の道中濵	佐藤政兵衛
岩代飯坂町湯澤	白田養壽堂
北海道圓山村	伊東儀八
同苗穗村五番地	鈴村馬助
上總東金北幸谷	高山音次郎
遠江國掛塚港	加藤太一郎
野州栃木河合町	卄屋利平
豐後國臼杵町	本多妙樂堂
前橋市細ヶ澤町	西村兼治郎
武州秩父大宮町	永井安之助
上州高崎連雀町	鈴木彦三郎
上總木更津貝淵	小倉源藏
名古屋建忠寺前	佐藤市五郎
駿州沼津町大門	長倉範吾
陸前氣仙郡盛町	千葉市治
仙臺市大町三	慈善堂
尾州熱田はたや	栗田善次郎
下總海上郡旭町	近江屋吉藏
陸前石之卷横町	菊屋善次
弘前土手町	野崎藥店
陸中鍬ヶ崎上町	堀田文七
岩代須賀川東十	吉川淺吉
盛岡市紺屋町三	大島常次郎
甲府市泉町	父母の屋金藏
甲府市常盤町	内藤寶藥部
函館辨天町	國領平七
信州松本大橋詰	增田武壽計
同上諏訪上町	宮坂金三郎
同小諸市町	藪原勇
北佐久郡鹽名田	望月喜之助
淺間温泉本郷村	手塚七太郎
南安曇郡穗高町	山屋浦吉
北佐久郡中佐都	荻原仙助
羽後酒田下內町	佐藤立志堂
同飽海郡市條村	阿部仁衛門
羽前東田川下山添	阿部德惠
上州太田町賀店	成田定三郎

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

婦女子必讀書發賣廣告

小野鵞堂先生書

古今集序[illegible]習字帖

全三冊　定價金三十錢　一冊十錢宛　一冊の郵税金二錢

近時一般父兄の注意を促し女子教育中かなの書風の必要を感せしめたるもの實に本帖の力なりといふも過言に非さるへし其一號より三號に至る漸く書體を小形に導き習字者をして知らす識らすの間にかな變體連綿の要を悟らしむる等捷徑の用意周到なるは恐く本帖に次く者なかるへし而して先生の書法に湛深なるは世既に許す所なるか故に省きて言はす江湖の令嬢願くも一帖を取て之か妙趣を味ひ賜へ

小野鵞堂先生編書

小學習字教育勅語帖

美製本　全一冊　定價金十錢　郵税金二錢

右は童蒙婦女子のため教育勅語の御旨意を和文に解釋し先生得意の筆法もて認められしものなれば其文の流暢なる其書の優美なる素より論を俟たす今回刻成に付各府縣公私高等女子小學校以上教科用書には最も適當の書なり

關根正直先生校閲　小野鵞堂先生編書

女子消息文のきまり

半紙形美製本　全二冊　定價金四十錢　郵税金六錢

本書は女子書翰の錯雜せる今日に在ては實に上乘の標準なるへしされは過日上巻出るや早くも各府縣公私立女學校の教科又は參考書等に供せられしもの少なからす然れとも本書の注意は下巻を得て始て全きを得るものなれは續て著者を促し茲に完備を告くるに至れるなり願くは一巻を閲て本書の價あるを知らんことを

發行所　東京々橋區南傳馬町一丁目十二番地　吉川半七

冬の御用

心なされませ追々御さむくなりますから御はだのあれませぬよう○玉子ぬか○又は玉のはだを御もちゐそばせ冬は御必用きめのよくなること請合いかほどあれ生の御方にても此玉子ぬかを御用ひ候得ばしぜんにゆで玉子のむきたての如くになります

登錄商標

一個十度用●定價一錢五厘折詰一個金廿錢

愛客様の御好につき**御進物用**に美麗なる折詰調進仕候間御用向被仰付度願上候

●玉掌露

ぎよくしやうろ

一名玉のはだ

小瓶　金六錢
大瓶　金十錢

抑この玉掌露は玉の如く透明にして中に香氣を含み皮膚を潤し艶を生ずる効能あり故に人々常に此露を手掌にたらし面部其外にぬりつくれば○のぼせるとなし○はだあれず○日にやけるとなしきめこまやかに也おしろいのなじみよく○にきび○そばかす○あせも○づさう其外總て悪きふきで者せず○しみを生ずるとなく又寒氣風あらき時は此露を常より多く用ふれは水使ひするとも○ひびきれず○しもやけせず四季共に皮膚の麗美をたもつと誠に無類の佳品にして實に掌中の寶玉とも云へし殊にしやぼんを御遣ひの跡にて御用なれば尤も効能多し

銀座一丁目つやふきん
電話番號四百七十二番

佐々木玄兵衛

郵便又は電話にて御注文の節は早速御届申上候

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

隔週發行 評論

明治二十六年十一月十八日發兌

第拾七號要目

時論

帝國議會の性質を論ず（岡田昌孝）〇群馬縣に於ける廢娼の理由及小歴史（石島良三郎）

時事

第五議會觀望（一）伊藤伯の贊（二）大隈伯と忠良純誠の士（三）板垣伯と星亨君〇治水の大策は農商務の官紀を正しふするにあるを痛論す〇上毛の廢娼論（三宅雄次郎述）

史傳

俳聖芭蕉（小此木竹文。布川靜淵）

徒然草

波のまに〳〵（若松賤子）〇獨嘯偶録（耶蘇の沈默）

雜録

外國正義の人の日本條約改正論〇市府教會（上）〇（一）市府教會總説（市府教會と他教會との關係〇市府教會の目的〇市府教會は純然たる基督教主義なり〇市府教會は市政府の股肱なり〇社會進歩の先登者〇市府の撰擧的義務）（二）市府教會の社會に對する任務（嬰見〇小供）〇内外佛教研究書目及畧解

海外風信

婦人撰擧權〇印度の貧民〇世界の富〇華盛頓の宗教〇グラッドストーン氏の出精

本誌代價

冊數	代價	郵税	
一冊	金六錢	金五厘	
六冊	前金 三十五錢	市外	三十八錢
十三冊（半年）	同 七十三錢	同	七十八錢
廿六冊（一年）	同 一圓三十錢	同	一圓四十三錢

發賣所 女學雜誌社書店

東京神田區表神保町六番地

女學雜誌定價表

冊數	定價前金	市外定價郵税共
一冊	金六錢	金六錢五厘
六冊	金三十五錢	金三十八錢
十三冊（半ヶ年分）	金七十三錢	金七十八錢
廿六冊（一ヶ年分）	金一圓三十錢	金一圓四十三錢

一本誌購讀者は代價郵税共凡て前金御拂込之事前金御拂込無之御注文有之候共一切送附不仕候

一本誌代價郵税共郵便小爲替にて拂渡局を必らず

一ツ橋郵便爲替取扱所へ宛御振込の事。

請取人は神田表神保町六番地女學雜誌社書店と御記入の事。

郵便切手代用は一割増（五厘切手に限る）にて申受け候。

一本誌御注文の節は住所姓名を明瞭に記載し號數は何號より何冊分と詳細に御書添への事。

發賣所 東京市神田區表神保町六番地 女學雜誌社書店

明治廿六年四月廿五日内務省許可

明治廿六年十一月二十四日印刷

明治廿六年十一月二十五日發行

發行兼編輯者 東京市麴町區下六番町六番地 巖本善治

印刷者 仝 牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地 根岸一光

發行所 東京北豊島郡王子村下十條八十一番地 女學雜誌社

印刷所 仝 牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍工塲（電話十九番）